唐代後半の北辺における軍糧政策

丸 橋 充 拓

はじめに

渭水流域から黄河の大湾曲部にかけての地域は関中と呼ばれ、古えより中国の政治的中心として栄えた。この地は当時の版図の中ではかなり西北に偏っており、経済的利便性の面で卓越しているとは言えない。にも関わらずそこに首都が置かれつづけた背景には、北辺や西域よりしばしば侵入する周辺民族より領土を守るという国防上の要請があった。確かに唐代後半には「武力国家から財政国家^①」の変質が進み、政策の力点も不可避的に大運河沿線に移行していった。だがその一方で軍事前線地帯としての関中の経済的維持が、政権の積極的な自助努力によってなお続けられていたこともまた事実である。それは、すでにこの地を引き払い、潼関以東に都を定めるようになった後の王朝に比べ、格段に差し迫った問題だったと推測される。唐朝はそうした課題にどのよう

に対処したのであるうか。

唐代の徴税体系では、穀物・布帛・見銭の三種が納入品目として定められた。いっぽう財政支出においては、軍費、次いで官僚への給与がその大部分を占めていた。これらのうち収入と支出、需要と供給の不均衡が最も甚だしく、その調達に多大な労苦が払われたのが「軍費項目」向けの「穀物徴収」、即ち軍糧に他ならない。それは関中が大規模な辺防軍を抱えていたにも関わらず、必要な食糧を供給するに足る生産力を持っていなかったことに起因する矛盾であり、そうした事態を前に唐朝は実に多様な調達手段を模索していく。

軍糧政策の全体的な見取図は、租庸調制時代に限っていえば日野開三郎・清水場東・李錦綉氏等の研究より窺い知ることができ^②。しかし唐代後半については各政策の制度内容や運営の実態が個別的に解明されているのみで、政策間の補完関係について有機

的に説明をしているものはほとんどない^③。そこでまず次章ではこの期間における軍糧政策の全体像を、先学の成果を適宜参照しつつ把握することに努めたい。

① 宮崎市定『大唐帝国』（『宮崎市定全集』八「唐」、岩波書店、一九九三等）。

② 日野開三郎「租粟と軍糧」（以下日野Aと略称。「日野開三郎東洋史学論集」第一巻「戸口問題と鑑買法」、三一書房等）、同「天宝末以前における軍糧田——『天宝末における唐の軍糧政策』の第二——」（以下日野Bと略称。同書に収録。）、同「安史の乱以後兩税法以前における税財政の銭額經理について」（以下日野Cと略称。同集第二巻「行政と財政」。清木場東「唐代財政史研究（運輸編）」「序論」（久留米大学経済叢書一、九州大学出版会、一九九六等）。李錦綉「唐代財政史稿（上巻）」（特に第三編第三章「供軍」。北京大学出版社、一九九五）。

③ 張国剛「唐代藩鎮財政收入与分配」（『唐代藩鎮研究』第一章、湖南教育出版社、一九八七）は個々の藩鎮単位ながらも財政收支全体の概括しており、参考になる。

一 軍糧の調達

(一) 正 税

正税とは、課戸、或いは編戸・主戸・土戸と呼ばれる担税農民に対して賦課される直接税を指す。本稿ではこの中で穀物税のみ

を分析対象とし、布帛・見銭の形で納められる税物は除外する。したがって具体的には租庸調制時代の租と地税、兩税法時代の兩税斛斗がこれに当たると見られる^②。軍糧調達においてこれらの果たした役割は一体どれほどのものだったのであろうか。

まず租庸調制時代については日野・清木場・李各氏も論及しているが、議論が甚だ錯綜し、定説を得ることは難しい^④。結論のみを大雑把に紹介すれば、日野・清木場両氏は軍糧のほとんど全てが正税から支出されていると見、李氏はその比率を低く見積る。

兩税法時代については概略的ながら誤解の余地の少ない文献が幾つか残されており、おおよその実態を推測しうる。まず貞元中には正税・屯田以外に度支からの支給を受ける兵が八万ないし九万人いた、と陸贄が述べている^④。これを建中元年（七八〇）の総兵数七万余と比較すれば、正税・屯田で養われる者がほとんどだったと言える。また『供軍図』という書物に拠れば、長慶年間、総数九九万人の兵に対する衣食は、五九万人分が兩税の留使留州より、四〇万人分が度支よりもたらされていたという^⑥。これらより少なくとも兩税法時代においては、軍糧の過半が正税でまかなわれていたと結論出来よう^⑦。

これらは全国を対象とした統計であり、屯田や和糶など、その他の手段も準備されていた北辺の場合、軍糧支出全体に占める正

税の割合は相対的に幾分小さかったかもしれない。とはいえ北辺諸道は、よく知られているように辺境防衛を担うことの見返りに兩税の上供を免除されており、他地域に比べその分多くの兩税斛斗を軍糧に回していたと考えられる。したがってその役割を見逃すことはできないだろう。前線の節度使たちは朝廷を経済的に支援することを免れる代償として、相当量の軍糧を自らの手で調達する義務を負わされていたとも言えよう。

確かに正税は屯田や和羅のように軍糧向けの目的税的な性格を持たないことから、軍糧政策のトピックとしては注目されにくい。しかし人丁ないし耕地面積単位で税率が固定され定期的に供給可能な正税は、王朝が行う諸徴収の基幹税目であり、決して低く評価されるべきではあるまい。ただこれを確保するためには不断の戸籍更新を通じて課戸を把握していくことが求められ、正税調達の難しさはそこにあつたと推測される。

(二) 屯 田

屯田とは広義には耕作者を集め入植させた官有地を言うが、軍糧輸送が困難な辺境において現地自給を行うべく隙地を開墾し、兵員に耕作させる土地、と限定的に定義する場合もある。また類称として「營田」という用語もあり、こちらは時に「広義の屯

田」と同じ意味で用いられ、或いは「狭義の屯田」の対語として「一般民に佃作させ、小作料を徴収するもの」とも定義される^⑨。「兩語は史料上必ずしも明確に使い分けられてはいない。ただいずれの場合も徴収された収穫物は結局軍糧に供されることになるので、本稿で両者を峻別する必要はさほど無い。差し当たり「屯田」の方を以下では使用していく。

屯田の制度内容については先学の分厚い蓄積が残されているので、まずはそれらを参照しつつ、同政策の展開を北辺に絞って簡単に押さえておこう。

唐代の屯田は、貞観以来の外征の成功に伴って各地に続々と設置され、玄宗時代に最初のピークを迎える。この過程が逐一史書に記録されているわけではないが、『大唐六典』卷七所載の屯田一覽および『通典』卷二に残された天宝八載（七四九）の各道屯取額（表一参照）は、唐代における一つの到達点を示すものと言える。ここからも明らかのように、総屯数一〇三九／総取額一九一万余石中、北辺に該当する河東・関内道は三八九箇所／八二万石（それぞれ約三七／四二パーセント）を占めており、三二六箇所／七〇万石（約三一／三七パーセント）の西域地方（隴右・河西道）とともに、屯田政策の中心的地位にあつた。また総取額一九一万余石を当時地方向けに計上されていた毎年の軍糧貯備一〇

唐代後半の北辺における軍糧政策（丸橋）

表一 開元・天宝中の道別屯田数・収穫量

	関内	河東	隴右	河西	河北	河南	劍南	計
屯田数	258	131	172	154	208	107	9	1,039
収穫量(石)	563,810	245,880	440,902	260,088	403,280	?	?	1,913,960

出典：屯田分布…宋本六典卷7 屯田郎中条、収量…通典卷2 食貨典屯田より（天宝8載の数字）

表二 安史の乱以降の屯田開設

年次	地域	主掌官	出典
大暦11 (776)	朔方五城	?	冊992
建中1 (780)	豊州	宰相・楊炎（→失敗）	冊497等
貞元3 (787)	京西北	宰相・李泌	鑑232
貞元4 (788)以後	涇州・良原	涇原節度使・劉昌 隴右節度使・李元諒 （夏綏銀節度使韓潭？）	旧152等 旧144等 旧13
貞元7 (791)	夏州	隴西経略軍使・劉潼	呂衡州集6
貞元10 (794)～元和2	鳳州普潤峽	天德軍防禦使・李景略	旧152等
貞元12 (796)～20	天德軍	鳳翔節度使・李惟簡	鑑238
元和6 (813)	鳳翔府	代北水運使・韓重華	韓昌黎集21等
元和6 (813)～8	振武・天德・代北	靈武節度使・李聽	旧133
元和15 (820)以後	靈武	靈武節度使（李進誠）	冊503
長慶4 (824)	靈武	判度支・王起	冊503等
大和6 (832)	靈武・邠寧	銀州刺史・劉源	冊673
大和7 (833)以前	銀州		
大中1 (847)～2	雲・朔・蔚州	河東節度使・王宰	山右石刻叢編9
大中3 (849)	原・秦・威州	靈武邠寧涇原鳳翔各節度使	会97
大中6 (852)～8	涇原	涇原節度使・裴誠	新173
大中6 (852)～10	邠寧	邠寧節度使・畢誠	新53
大中11 (857)以前	河・渭州	秦成防禦使・李承勛	鑑249
咸通初	大同軍	大同軍防禦使・盧簡方	新182

出典略称…旧：旧唐書、新：新唐書、冊：冊府元龜、会：唐会要、鑑：資治通鑑

〇〇万石と比較しても、屯田が無視できない収穫を上げていたことが窺えよう。

ところが安史の乱が起こり、更に吐蕃の侵入が激化すると、屯田の運営は重大な困難に達する^⑬。大暦五年（七七〇）には華・同・沢三州以外の諸州屯田を停止する詔までもが出され、朝廷としては政策を半ば放棄した格好となった^⑭。かかる状況は徳宗の即位当初も打開できなかつたようで、建中元年（七八〇）には楊炎が復興を図つたものの、耕作者の確保に失敗したことが災いして十分な成果を得ることが出来なかつた^⑮。

凋落傾向に変化が現れるのは、貞元年間に入ってからである。建中末より小康を得ていた吐蕃の侵入が再燃し始めたこのころ、屯田の利を訴え、その再興を唱える議論が李晟・韓滉・李泌

といった錚々たる顔ぶれより澎湃として巻き起こり、これと歩調を合わせるように実際の事業も次々に着手されていく。表二は安史の乱以降の展開を一覧にしたものだが、貞元中より復興が緒に就き、大和年間までにおおむね北辺全域で屯田が興されている様子が見て取れる。この半世紀余の期間は唐代屯田政策の第二のピークと言えよう。

表二からは、このち大中年間にも屯田が盛んに設けられたことが窺える。これらは武宗時代の回鶻の侵入、宣宗初における河湟地方の回紇、そして沙陀族・党項族の台頭等、流動化した唐宋の北辺状況に即応して設立されたもので、唐朝がこののち一〇世紀初頭まで命脈を保つに当たっては少なからぬ役割を果たしたと思われる。

以上のような経過を概観すれば、屯田が軍糧供給上大きく貢献し、とりわけ北辺において重点的に設置されたことが了解される。それを踏まえて、今度は屯田の持つ特質を考察し、他の政策との補充関係を知るための手がかりを探っていこう。

屯田は他の手段に比して最も効率的で無駄のない方策であった。当時の人々もしばしば指摘している如く、現地で作すために、内地から軍糧を輸送するより労力と経費を相当節約できる^⑧。またあまり注目されていないが、屯田は全收穫に対する官の取り分

が大きいという利点もある。古えより公田の税率は民田からの正税徵収率より高く設定されてきた。たとえば職分田や公廩田の場合には毎畝六斗が上限とされており、毎畝二升の地税より格段に高率である^⑨。屯田のうち民に佃作させる「営田型」はほぼこれと同様だったと思われる。一方、兵員を活用する所謂「屯田型」に至っては、耕作者自身の消費分も徵収される剰余生産物も結局すべて軍用に供される。

こうした利点の一方で、軍事前線地帯に布置される関係上、しばしば外敵の侵略にさらされるため、耕作者を常駐させ、長期的に維持していくのが難しいという宿命的な欠点も持っていた。ただ吐蕃や回鶻等は收穫期になると北辺に來寇するものの、そこに長く居座ることはなく、やがて本拠地へ帰っていく。屯田の侵犯それ自体は一時のことに過ぎない。屯田が長続きしない理由は、むしろその後なかなか復興の手が着けられない点にあった。例えば建中元年（七八〇）に宰相楊炎が豊州で屯田を開こうとした際にこれに反対した京兆尹嚴郢は、当時の同地方の様子を次のように語った。

案ずるに旧屯は沃饒の地なるも、今十に一も耕さず。若し力めて墾闢べくんば、浚渠を俟たず。その諸屯は水利もて種うべきの田甚だ広し。蓋し功力及ばず、因って荒廢を致す。

『冊府元龜』卷四九七・邦計部河渠・建中元年正月条

また元和年間における靈州の土地利用状況はこう報告されている。

〔賀蘭〕山の東、〔黃〕河の西に平田数千頃有り。水を引きて溉灌すべし。如し尽く地利を収むれば、以て軍儲を贍給するに足るなり。

『元和郡県圖志』卷四・靈州靈武県賀蘭山の項

さらに会昌六年（八四六）敕文には、回鶻侵入直後の農耕断絶が伝えられている。

靈武・天徳・三城の封部の内は、皆な良田有り。居人無きに縁りて、久しく耕種を絶つ。

『冊府元龜』卷五〇三・邦計部屯田・会昌六年五月五日敕

節文

この三史料に描写される如く、北辺には農耕に適した土地が存外に多い^②。屯田崩壊の原因は単なる農業生産力の乏しさよりも、むしろ耕作者の不在に求めるべきことが読み取れよう。そして実際、この期間に屯田が復興されるに当たっては、労働力を不断に供給できるか否かが最重要課題とされていた。

たとえば建中元年（七八〇）に楊炎が豊州の屯田を開こうとした際には、労賃を与えて京畿の民を雇備するという方法が採用された。しかし人夫に支払う給与の見積りが甘く、また強制的な徴

発が首都圏の人々を苦しめたことから、これを定着させることは出来なかつた^②。北辺の屯田は耕作者を雇備するには経費がかかりすぎ、また他処から無理やり集めればその地の民を苦しめることがここで浮き彫りになった。つづく貞元から大和年間にかけては、兵員の農耕従事、貧民等を対象とする請佃者の募集、配軍された罪人の駆使といった様々な工夫が試みられたが^②、これらはみな雇備の形を採らず、また遠方在住民の強制徴発を避けている点で、前代の教訓を踏まえた方策といえる。前述の如くこの時期には屯田の復興が一応の成功を収めた。その背景にはこうした措置がある程度功を奏した点を挙げる事ができよう。

とはいえこの問題は結局抜本的に解決されるには至らなかつたらしく、「耕作者がいなかったために、あたら豊かな土地が放置されている」状況は、屯田実施記録の合間合間に頻々と報告されている。前引の『元和志』や会昌六年敕の記述も、結局こうした施策が継続的には行い得なかつたことを示唆しているのだろう。そしてその根元には、傭兵化した兵員たちの耕作忌避、という意識レベルでの変化が色濃く影を落としていたと推測される。例えば元和六年（八一）に韓重華が大同盆地からオルドスにかけて屯田を開いたとき、兵士の離農の様子が次のように描写されている。

辺軍は皆な耕作を知らず、口を開きて哺を望む。有司常に人

を飢い、車船を以て他郡より往輸す。

〔『韓昌黎集』卷二一「送水陸運使韓侍御歸所治序」〕
また長慶三年（七三三）三月一〇日の德音には、官健が世襲化し、農耕と疎遠になりつつあることへの懸念が表明されている。

轄門に委質し、營壘に分師して、干戈に役すること有るも、耕稼に由る無し。況んや天宝より已後、屯兵すること七十余年なり。皆な父子の軍と成り、農桑の業に習わず。一朝罷めて隴畝に帰らば、頓に衣糧を絶つ。言に饑寒を念い、深く用て嗟憫す。〔『文苑英華』卷四三七「叙用勲旧武臣德音」〕
そのほか大和年間の靈武・邠寧では兵員はおろか民までも農業から離れていたとい^②う。

以上のように即便性の高い屯田の維持には様々な手段が講ぜられたものの、外敵を目の前に控えた前線地帯では労働力確保という大きな障壁が立ちはだかっていた。次節で述べるような補給政策を膨大な経費を投じてまで続けざるを得なかった理由もまさしくここに存したと言えよう。

（三）和糴・折糴と上供

ここまで扱ってきた正税と屯田は、個々の辺軍で軍糧が調達されている点で現地自給と呼びうる。一方、和糴と上供はおおむね

中央からの補給に該当する。ここで「おおむね」と留保をつけたのは、和糴の中に北辺において現地自給用に行うものもあったからである。「就軍和糴」とも呼ばれるこの方法は唐初以来しばしば行われ、豊年時に備蓄創出を図るべく実施されることが多かった。これに対し、京兆府や河東・代北地方では後方からの支援を目的とする和糴も行われ、^②こちらは豊凶の別なく毎年実施することが次第に定着し、^③不断の食糧輸送を確保していた。従来の研究では「就軍和糴」と京兆府や代北の和糴が同じように扱われてきたが、両者は自給か補給か、そして豊年限定か経常実施かという二つの側面で性格を異にしており、明確に区別すべきものと考え^④る。

そして中央からの補給を構成するもう一つの柱が、江淮からの上供穀物である。詳細は次章に譲るが、これは辺軍用と中央用に分割された。つまりここには京師に駐在する禁軍に給与される部分も相当含まれているので、上供額全てが辺軍に回されていたわけでないことに注意する必要がある。

両政策は関中における穀物需要を後方から支援する手段として大きな役割を果たしたが、^⑤ともに一長一短があった。そのため何をより重視すべきかに関する議論が唐代後半には盛んに戦わされた。そしてそうした論戦は両者がいかなる補完関係にあったか

を読み解く上で多くの示唆を与えてくれる。先ずは、和羅重視派と漕運重視派の主張を中立の立場からの確に評価している陸贄のコメントを一瞥しよう。

聞見に習いて時宜に達せざる者は、則ち「国の大事は費損を計らず。故に承前に『一斗銭もて一斗米を運ぶ』の言有り。

勞煩を知ると雖も廃すべからざるなり」と曰う。近利に習いて遠患を防がざる者は、則ち「秋成の時に至る毎に、但だ畿内をして和羅せしむれば、既に集事に易く、又た勸農に足る。何ぞ必ずしも転輸して、徒らに財賦を耗らさんや」と曰う。

臣以えらく両家の論は互いに短長有り、各おの偏執の懐を申べて、俱に變通の術に味し。（本章註④《陸贄奏議》）

「漕運は祖法であり、いくら経費がかかっても死守しなければならぬ」というのが漕運論者の言い分で、これに対して彼は現実には疎いと論断する。漕運にかかる費用の過大さは沈亞之なども批判しており、上供の最大の欠点はここにあったことが窺える。一方「收穫期に畿内で和羅すれば、大きな出費もなく食糧を確保できる」と述べる和羅論者は、目先の利益にとらわれて後々の弊害を考慮していないと評される。右文の前段で陸贄は、徳宗朝で始められた就軍和羅が本来素晴らしい施策でありながら、担当官たちが働く様々な不正のためにうまく行かなくなっていることを指

摘しており、ここでいう弊害とはそれらを念頭に置いていると思われる。白居易など様々な人々が厳しく攻撃しているように、和羅には穀物の過剰な科配、買いたたき、代価の未払い等の問題が常につきまとい、それが宿命的な欠点として後々まで引き継がれていく。また史書には明示されていないが、和羅の買上額は性質上年々の豊凶に大きく左右されることになるから、食糧の安定供給という点でも弱みを持っていたと推測される。

こうした問題を抱えつつも和羅がお打ち切られることがなかったのは、漕運可能な穀物の量に限界があったからであろう。よく知られているように開元二五年（七三九）における関中和羅政策の開始は、上供業務およびそれに伴う東都就食の困難さに動機づけられていた。最高四〇〇万石の漕運を達成していた玄宗時代ですらそうだった以上、高々四、五〇万ほどしかもたらされていなかった唐代後半において、上供のみに頼ってはいはとも膨大な需要に応じきれなかったと推察される。そういう意味において、関中の江淮に対する経済依存度は、和羅の経常化や屯田の復興が進められた唐代後半にはかえって後退していたともいえる。しかし減額されたとはいえ上供を完全に中止してしまうことが出来なかったのもまた事実である。たとえば白居易は上供がなにもゆえ堅持されるべきなのかについて次のような見解を提示している。

夫れ都畿とは、四方の溱まる所なり。万人の会する所なり。

六軍の聚まる所なり。利は近蜀の饒を称すと雖も、猶お未だその用を足らしむ能わず、田は上腴の利有りと雖も、猶おその費に充つるを得ず。沉んや日ごとくにその穀を削り、月ごとにその食を糜ましむべけんや。故に国家は歳ごとに東南の粟を漕して以て給し、時に中都の粟を発して以て賑う。関中の人を贍い、天下の食を均しうする所以にして、古今易えざるの制なり。

〔白氏長慶集〕卷六三・策林二「二十四、議罷漕運可否」
今後も減る見込みのない莫大な食糧需要は関中のみでは満たしきれないので、上供による調達を基本としつつ、必要に応じて中央から賑給を行うのが常道だという。

以上を総括すれば、食糧補給部門は相対的に経費のかからない和糶と安定供給の可能な上供とが補完し合っている、という図式が見て取れよう。

中央からの軍糧補給手段としてもう一つ忘れてならないのは折糶である。これは兩稅錢の一部を等価の穀物に読み換えて徴収するもので、貞元二年（七八六）より始められ、京兆・河南・河中等の十数州府で經常実施された。そしてその眼目は和糶および兩稅錢徴収時の弊害を補う点にあった。すなわち百姓は和糶穀物を

売却する際には官によって、兩稅錢を手に入れるべく作物を売り払うときには商人によって買いたたきを被る。その点折糶ならば生産物を直接納入するので利鞘の生ずる余地がなくなり、不正も防止できる、という寸法である。ところがこの政策は本来当該州県で支用するはずだった兩稅錢の一部を軍糧に振り向けたものに過ぎないため、無闇に拡大しようとすれば今度は当地の財政収入を侵犯してしまう。つまり徴収額に初めから制限が設けられていることになる。事実、各地の折糶割当額は京兆府の二五万石を除けばいずれも一〇万以下と小規模に止まっている。

以上、唐代後半に関中で実施されてきた軍糧調達手段をひとつとおり通観した。これらを大別すれば、現地自給に当たるのが正稅・屯田・就軍和糶、中央からの補給に相当するのが上供・京兆府および代北における和糶、そして折糶である。そして各政策間の補完関係は次のように要約できよう。まず安定供給が可能な正稅と即便性の高い屯田を極力維持することで、現地自給の確保を図る。また豊作に恵まれた場合には随時就軍和糶を行って備蓄に供する。しかし正稅には課戸の把握、屯田には労働力の供給、就軍和糶には自然条件という、何れも高いハードルがあったため、不足する分を中央からの支援に依存することとなる。補給三政策

のうち和羅は安価に実施できたものの買上額の不安定さや諸々の弊害を免れず、上供は比較的安定供給ができたが輸送には莫大な費用がかかる。さらに折羅は和羅に付随する諸々の不正を予防できた一方で徴収量に制限がある。このように各補給手段にもそれぞれ固有の長短があったため、これら全てを併用し相補完させる形が採られた。北辺軍糧調達のための基本的な構図はこのようなものであったと考えられる。

- ① 正税という語について予め規定をしておきたい。類似の表現としては租税・地租、或いは税畝・地税（兩税法時代の「地税」は兩税斛斗そのものを指す）等があるが、後二者は租という語辞に莊園や公田の小作料という含意もある点、後二者は人頭税である唐代前半の租となくならない点から、些か使用しにくい。よって最も過不足ない呼称として本稿では正税を用いる。この語は『旧唐書』（以下旧書と略称）巻四八・食貨志の序や『冊府元龜』（以下冊府と略称）巻九〇・帝王部教宥・元和十五年二月丁丑条等に用例が見られる。
- ② 渡辺信一郎氏は正税を租庸調と兩税の総称として用い、唐代前半の地税はそこに含まれていない（『唐代後半期の中央財政——戸部財政を中心に——』京都府立大学学術報告・人文四〇、一九八八）。本稿では軍糧に回充されるようになった地税は事実上正税化していたと見なし、一括して扱う。また江淮からの上供穀物には正税に由来するものが多く含まれていると考えられるが、行論の便宜上別枠とし、ここでは北辺各道州で徴収される分のみを想定する。
- ③ 「はじめに」註②日野A・清木場論文・李論著を参照。三氏は『通典』巻六の所謂「度支歲計」「軍事費統計」を基礎資料として議論を

展開する。これらは租庸調制下の財政収支を知る上で重要な手がかりを与えてくれる有名な記録だが、各統計間、各費目間の関係が明記されていないため、勢い推論を交えた様々な解釈が生じることとなる。いま問題となるのは支出の項に記された「二十万、諸道節度軍糧及貯備当州倉」の財源として正税がどれほどの割合を占めるかであるが、これに対する各氏のアプローチは著しく異なり、逐一紹介している紙幅はない。何れも多種多様な史料源から得た数値を駆使し、換算に換算を重ねて仮説を導いているため、どの見解がより妥当なのかを比較検証するのは困難である。

- ④ 『陸宣公集』巻一八・請減京東水運取脚備於沿辺州鎮儲蓄軍糧事宜狀（以下『陸贄奏議』と略称）「今：除所在宮田・税畝自供之外、仰給於度支者尚八九万人。」
- ⑤ 『資治通鑑』（以下通鑑と略称）巻二二六・建中元年末条。

- ⑥ 旧書卷一七・文宗紀・開成二年正月庚寅条「戸部侍郎・判度支王彦威進所撰供軍圖、略序曰：長慶戸口凡三百三十五万、而兵額又約九十九万、通計三戸資奉一兵。今計天下租賦、一歲所入、總不過三千五百余万、而上供之數三之一焉。三分之中、二給衣賜。自留州留使兵士衣食之外、其餘四十万衆、仰給度支焉。」なお旧書卷一五七・王彦威伝には「三万（分の誤）之中、二給衣賜。自留州留使兵士衣賜之外、其餘四十万衆、仰給度支。」とあり、軍糧は除外されている。ここでは衣賜と軍糧を峻別する必要はないと思われる。

- ⑦ 李吉甫撰『元和国計簿』には、元和初頭の財政状況が次のように概述される。「史官李吉甫撰元和国計簿、……其鳳翔・鄜坊・邠寧・振武・涇原・銀夏・靈塩・河東・易定・魏博・鎮冀・范陽・滄景・淮西・淄青十五道、凡七十一州、不申戸口。每歲賦入倚辦、止於浙江東西・宣歙・淮南・江西・鄂岳・福建・湖南等八道、合四十九州、一百四十四万户。比量天宝供稅戸、則四分則一。天下兵戎仰給軍官者八十

三万余人、比量天宝士馬、則三分加一、率以兩戸資一兵。……(旧書卷一四・憲宗紀・元和二年二月己卯条)兵員のうち「給を畀官に仰ぐ者」が八三万人に上るといふ。こゝでいふ畀官が単に「お上」を意味するものなのか、地方官署としての畀(或いは州や道)に限定されるのか判然としない。前者とすればこの値は食糧を自備する団練兵以外の兵の数を指すに過ぎないが、仮に後者であれば兩税の留粟(或いは留州・留使)分で養われる者の数となり、兩税より衣食を受ける者の割合が極めて大きかったことの根拠ともなりうる。

- ⑧ 本章註⑦旧書卷一四・憲宗紀を参照。
⑨ 青山定雄「唐代の屯田と管田」(史学雑誌六三一、一九五四、特に第一章)。

⑩ 本章註⑥青山論文、D. C. Twitchett, *Lands under state cultivation under the Tang*, *Journal of Economic and Social History of the Orient* II.2-3, 1959. 「はじめに」註②日野B、黄正建「唐代後期的屯田」(中国社会経済史研究一九八六一四)、張沢咸「唐和五代時期的屯田」(「中国屯墾史」中、農業出版社、一九九〇)、同氏・郭末義「中国屯墾史」(特に第三章「隋唐五代屯田」)。中国文化史叢書五九、文津出版社、一九九七)。

⑪ この箇所は近衛本では佚脱しているが、現行の広池学園本や中華書局本では宋本によって補われている。

⑫ 「通典」卷六所載の所謂「度支歲計」を参照。屯田の収額がこの一〇〇〇万石の中に含まれるか否かについて、諸家の見解が分かれているが、何れにしても必要欠くべからざる項目だったことに違いはあるまい。「はじめに」註②の諸論考を参照。

⑬ 「新唐書」(以下新書と略称)卷二五・突厥伝・序には「大曆初、減至六千畝、畝殷一斛、歲少四五百万斛。地利耗、人力散、欲求彊富、不可得也。」という杜佑の発言が載せられており、屯田の衰退状況を

窺うことが出来る。

⑭ 冊府卷五〇三・邦計部屯田。

⑮ 確かに冊府卷九九二・外臣部備禦・大曆十一年正月辛巳条には「加朔方五城戍兵、及增修屯田。備回鶻也。」新書卷二二六・吐蕃伝には「(大曆)十三年、虜大酋馬重英以四万騎寇靈州、塞漢、御史・尚書三渠、以擾屯田。」と述べられており、この期間の屯田の存在が暗示されているが、大勢として不振だったことに変わりはない。

⑯ 冊府卷四九七・邦計部河渠。原文は本章後註⑳を参照。

⑰ 李晟は通鑑卷三三一・興元元年八月癸卯条、韓況は旧書卷二二九・本伝、李泌は通鑑卷三三一・貞元三年七月条、やや下つて元稹等にも発言が見られる(「元氏長慶集」卷三三・論西戎表)。

⑱ 唐代前半と後半の事例を一つずつ挙げておこう。「常之以河源軍正当賊衝、欲加兵鎮守、恐有運輦之費、遂置烽戍七十余所、度開管田五千余頃、歲收百余万石。(旧書卷一〇九・黑齒常之伝)」新書卷一〇の本伝よりこれは調露中のことと知られる。また「以西北辺備戍有和市以給軍、勞人饋輓、奏於靈武・鄯寧起管田。(旧書卷一六四・王起伝)」冊府卷五〇三・邦計部屯田は本記事を大和六年二月に繫げると。

⑲ 「唐会要」卷九二・内外官職田・開元一九年四月条「勅、天下諸州畀并府鎮戍官等職田頃畝籍帳、仍依允租佃對定、無過六斗、地不毛者、畝給一斗。」

⑳ この他、元和一二年には沈亞之が「今岐隴之士甚饑、農食不充稅裨、衣結縷無帛布(『沈下賢文集』卷一〇・西辺患對)」と報告し、大和六年には王起が「靈武鄯寧田土寬広、又復肥濃、悉堪種蒔(冊府卷五〇三)」と述べるなど、もともと肥沃であることを伝える記録は北辺各地にわたって見られる。

㉑ 冊府卷四九七・邦計部河渠・建中元年正月条「凌豊州之陵陽渠。時楊炎為相、議開陵陽渠、發京畿人、於西域就役、閭里騷擾。炎不習辺

事、請於豐州屯田、人頗苦之。時京兆尹嚴郢嘗從事朔方、曉其利害、乃具五城田屯及兵募、倉儲等數、奏曰……又每人須給錢六百三十・米七斛二斗。私出資費、數又倍之。撫所收必不登本、關輔之人、不免流散。……疏奏不報。郢又上書曰……。時安方用事、郢讓不省。卒開陵陽渠。而竟棄之。」

② 兵員による耕作には、①兵任を解いて就農させる、②兵士を辺軍所属のまま耕作に用いる、③軍務と農耕とを輪番で行わせる、という三種の方法が見られる。貞元三年に李泌が行った事例は①に当たる。彼は兵役を満了した防秋兵より辺境定住希望者を募り、農具等を支給して耕作せしめるようにした。「泌」対曰、戊卒因屯田致富、則安於其土、不復思歸。旧制、戊卒三年而代、及其將滿、下令、有願留者、即以所開田為永業。家人願來者、本貫給長牒統食而遣之。撫應募之數、移報本道。……既而戊卒應募願耕屯田者什五六。（通鑑卷三三二・貞元三年七月条）当時、防秋兵は総数一七万人だったと言うから、一〇万人前後の労働力が創出されたことになる。次いで②に該当するのが「食糧健兒」と呼ばれるものである。「諸道除辺軍營田処、其軍糧既取其正稅米分給、其所管田自為軍中資用、不合取百姓營田并以瘠薄地廻授百姓濃肥地。其軍中如要營田、任取食糧健兒、不得輒妄招召。（冊府卷九〇・帝王部教宥・元和一五年二月丁丑条）」ここでは屯田を一般民に無理やり請佃させてはならず、必要ならば食糧健兒の収穫を徴収すべきことが述べられている。彼らが兵農を兼務しているのか、定かではない。ただ少なくとも一般民とは一線を画し、辺軍に所属する身分だったことは間違いない。③は長慶元年正月三日の敕文に見られる。ここでは民間の逃絶田に官健を入植させることが命ぜられた上で、その運営形態が「其官健、仍量借貸種糧、分番上下、各任當農。放三年差稅、年限滿後、撫桑地準例固定。合當下番當農者、停給月糧、其衣

物賜及雜賞給、並如旧。（文苑英華）（以下英華と略称）卷四二六・同日南郊改元敕文」と規定される。軍務への従事と屯田の耕作を交替で行い、下番者（耕作者）には月糧の支給を停止するという。月糧とは官健に対する食糧立ての基本給与である。右の表現より、上番者（従軍者）には月糧を支給し、下番者には屯田収穫物の消費を認めるという図式が看取される。輪番制によって兵農を同時進行で担う労苦から免れている点に特色がある。

つづいて貧民の入植については英華卷四三〇・大中元年正月一七日敕文に記載が見られ、貧民を募って閑田を耕作せしめ、その収穫を災害用の備蓄と軍糧に充てることが命じられている。

最後に罪人の駆使する方式は、元和六年に韓重華が行った屯田を皮切りに登場する。「吾族子重華適當其任、至則出贖罪吏九百余人、脱其桎梏、給耒耜与牛、耕其傍便近地、以償所負、积其粟之在吏者四十万斛不徵。；故連二歲大熟、吏得尽償其所亡失四十万斛者、而私其贏余、得以蘇息、軍不復饑。（韓昌黎集）卷二一・送水陸運使韓侍御歸所治序」そしてそれは所謂「天德五城配流」と密接に結びついていく。英華卷四二六・長慶元年正月三日南郊改元敕文には「其天德軍流人、滿十年即放廻、其糧賜委防禦使、便例召人充補營田驅使。」とあり、罪人放還後の屯田を別に佃作者を召募して耕作させていることが定められている。つまりその土地はそれまで罪人たちが耕やっていたことになる。また会昌六年五月には「靈武・天德・三城封部之内、皆有良田。緣無居人、久絶耕種。自今已後、天下因徒合處死刑、憤（憤）の誤、非巨蠹者、特許生全、并家口配流此三道、仍令本軍鎮各取管安存、兼接借農具、務使耕植。（冊府卷五〇三・邦計部屯田）」との命令が出された。ここでは死一等を免ぜられた罪人を天德等に配流し、農耕に従事させるといふ。入植先が屯田と明記されているわけではないが、先の史料と考え併せればそういうケースも当然多分に見られただろう。

なお配流と配地での労働（居作）に関しては辻正博「唐代流刑考」（京都大学人文科学研究所「中国近世の法制と社会」所収、一九九四）を参照。

②③ 新書卷五三・食貨志三「靈武・鄠寧、土広肥而民不知耕。大和末、王起奏立営田。」

②④ 本章註④《陸贄奏議》「陛下頃以辺兵衆多、軋餽勞費、設款軍和羅之法、以省運、制与人加倍之備以勸農。此令初行、人皆悅慕、争趨厚利、不憚作勞、耕稼日滋、粟麦歲賤。……果能用之、足謂長算。既而有司隘吝、不克將順、忘国家制備之謀、行市道苟且之意。当稔而願羅者、則務裁其備、不時斂藏、遇災而艱食者、則莫揆乏糧、抑使取羅。遂使豪家貧吏、反操利權、賤取於人、以俟公私之乏困、乘時所急、十倍其贏。」

②⑤ 唐代後半にはこうした和羅が備蓄にも回されるようになるが、災害時の賑恤用に準備されることが多く、軍費としての性格はむしろ希薄である。菊野恭子「唐代の和羅」（お茶の水史学一、一九五八）、盧向前「唐代中後期の和羅」（文史四一、一九九〇）を参照。

②⑥ 拙稿「唐代関中和羅政策と兩税法」（古代文化五一―七掲載予定、一九九九）第一章を参照。

②⑦ 和羅の果たした役割に関しては鈴木正「唐代の和羅に就いて」（一）／（二）（歴史学研究七七／七八、一九四〇）、上供については外山軍治「唐代の漕運」（史林三二―三、一九三七）を参照。

②⑧ 「沈下賢集」卷三・学解嘲对「今以三千人食勞輸江淮歲貢三十万斛、迎流越險、覆被敗輓、不得十半。自漕（渭の誤）以東、督稽之官凡四十七署、署吏不下百数、費錢十千万為大数。」

②⑨ 本章註④《陸贄奏議》。該当記事は本章註②を参照。

③⑩ 「白氏長慶集」卷五八・奏状一・論和羅状。

③⑪ 新書卷五三・食貨志三等。

③② D. C. Twitchett, *Financial Administration under the Tang Dynasty*, Second ed. Cambridge University Press, 1970, pp. 93-4.

③③ 折羅に関する専論はないが、船越泰次「唐代兩税法における斛斗の徵科と兩稅錢の折羅・折納問題」（『唐代兩税法研究』第二部第二章、汲古書院、一九九六等）には主要な史料が提示され、解釈が施されているので参考になる。ただし関心が兩税法の課稅体系にあるため、折羅そのものの実態を知るには充分ではない。

③④ 貞元二年一〇月には京兆・河南・河中・同・華・陝・晉・絳・鄆・坊・丹・延の二三州府が、翌年閏五月には前年すでに兩稅の前借りをした京兆府を除く二三州府が折羅の対象となっていた。また元和八年に折羅粟を見錢で折納することを認めた折には、京兆・河南・河中・同・華・陝・絳・河陽の八州府一道が対象とされた（何れも冊府卷五〇二・邦計部平羅。折羅が經常実施されたことは旧書卷一四・憲宗紀・元和六年一〇月戊寅条の「……京兆府毎年所配折羅（羅の誤）粟二十五万石宜放」という記載より確かめられる。また元和十一年には過去二年間の折羅通欠が免放されたが（冊府卷四九一・邦計部蠲復）、もともと經常収支に計上されていなければ通欠が生じることがあり得ないだろう。なお折羅粟は軍糧ばかりではなく、災害時の賑恤用に備蓄されることも多かった。冊府卷一〇六・帝王部惠民・元和九年二月丁未条、同書卷五〇二・邦計部平羅・長慶四年八月条、同書卷元年八月条、英華卷四三六・賑恤諸道遺旱百姓勸（大和八年正月二十四日發布）、《唐大詔令集》卷八六・咸通七年大赦を参照。

③⑤ 元和八年（八一三）に折羅粟を見錢で折納することを認めたとき、対象となった各地の割当量は次のように記されている。「權判度支・兵部尚書王紹奏、請折羅粟、京兆府二十五万石、同州五万石、華州三万石、陝州五万石、虢州三万石、河中府三万石、絳州二万石、河南府六万石、河陽節度管内十万石、准旧仍各於本州処中旬時估、每斛加餽

五之一、京兆府量加五之二、以当府秋税背苗钱折納、仍委戸部以不折估正段、摠数俱還。従之。（冊府卷五〇二・邦計部平糶・同年九月癸丑条）また元和六年に下された詔には「詔、……京兆府毎年所配折糶（糶の誤）粟二十五万石宣放。於百姓有粟情願折納者、時估外特加優饒。……（旧書卷一四・憲宗紀・同年一〇月戊寅条）」との記載が見られる。京兆府に毎年課されていた折糶額は二万五万石であるといひ、これは前掲王紹奏の数値と一致する。よって同奏に列挙された数字は各州府の毎年の折糶課額と見なしえよう。

二 軍糧の分配

前章では、唐朝が如何にして軍糧を確保していたかという、いわば調達の部分に焦点を当てた。調達ないし徴収の過程は、従来の研究でも大きな関心が寄せられてきた分野と言え、ここまでの議論も結局はその延長線上にある。しかしこの十年ほどの間、財政史研究全体の問題として「収入論への偏向と支出論の欠如」がしばしば指摘されるようになった。軍糧政策を分析する上でもこの問題を避けて通ることはできないだろう。幸い近年、李錦綉氏と清水場東氏が相繼いで著作を発表され、唐代の財政支出の研究に一定のたたき台が示された。^①ただ前者は租庸調制時代のみを分析の対象とし、後者は軍費とりわけ軍糧への論及が十分にないこと、唐代後半における軍糧支出に關してはなお一

考の余地が残されていると思われる。そこで本章ではこの問題を取り上げていく。

軍糧の支出ないし分配を理解する上で、明らかにしなければならぬのは調達源・担当官司・供給先の対応関係、言い換えれば「どの食糧を誰がどこに支給するか」である。以下では調達源を現地自給（兩稅斛斗・屯田・就軍和糶）と中央からの補給（京兆府および代北での和糶・折糶・上供）とに分け、考察を進めていきたい。

（一）現地自給

前章で明らかにしたように兩稅斛斗は軍糧向けに支出されたが、その出納業務は言うまでもなく各道節度使（厳密にいえば觀察使・支度使）と各州刺史が担当した。また供給先については、まず少なくとも兩稅斛斗が州兵、すなわち節度使や刺史の指揮下にある兵員にもたらされていたことは間違いない。なぜなら兩稅の留使留州分は度支の統制を受けつつも道州内で支用する原則があるからである。加えて前章にも引いた『供軍圖』では、留使留州より衣食を受ける者が六〇万人近くいることが記されていた。^②③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵

一方、兩税斛斗が禁軍に支出されていたことを暗示する記録も残されている。長慶中に同州刺史元楨が上呈した「同州奏均田状」によれば、神策軍の出先機関である神策外鎮が、組織の埒外にある一般農民から、しかも州県の課税体系を通じて軍糧の徵発を行っているという。

「当州、左神策郃陽鎮に供せる軍田粟二千石。」右は軍鎮を置く日より、伏して勅令に準い、百姓の高荒田地一百頃を取りて、給して軍田に充つるも、並びに田地零碎に縁り、軍司の佃用は得ず、遂に原司をして畝ごとに粟二斗を出さしめ、その粟は並びに是れ一県百姓税上に科配す。偏當に重斂して、事實は均しからず。臣、今已に七県の応に税すべき地上において、事を量りて配率す。此れより亦た均平を冀う。

ここから読み取れるように、神策外鎮は所轄屯田の収穫が不足したため、所在州県に迫って同地の農民より毎畝二斗の軍糧を供出させていた。事実上兩税斛斗が増税され、禁軍に供されていたのと変わりが無い。ただ右上奏が神策軍の横暴を批判することを趣旨として提出されている点に鑑みれば、州県から外鎮へ正税が直接供されるといふ流れが正式に認められていたわけではあるまい。制度の裏づけなしに、力任せで州県の支配体系に寄生していく禁軍の性行が、ここに如実に現れていると言えよう。

以上より兩税斛斗は節度使や刺史の指揮のもと州兵にもたらされるのが通例で、時に禁軍が支給を強要する場合もあったことが判明する。

屯田には各道州で運営するものと中央に所屬するもの、そして神策外鎮管下のものがある。表二を振り返れば、元和年間に水運使韓重華が代北に開いたものと大和中に判度支王起が靈武・邠寧に設置したものが度支所管であり、その他はみな節度使の手で開設されている。代北屯田はその後も度支に直屬する代北水運使の下で維持され、その収穫は代北や振武の州兵たちにもたらされた^⑤。一方、王起は度支の出先機関と思われる當田務を設け、その運営を担当させた。記録の乏しさゆえ詳細を知ることが出来ないが、王起の上奏に「本道と計會」する旨が述べられており、これもやはり州兵に支給されていたと推測される。そしてその他の節度使主導の屯田は当然州兵向けだったと考えて差し支えあるまい。一方、禁軍所轄の屯田の存在は、先掲「同州奏均田状」中に「軍田」の名が見えることより裏づけられる。その運営を誰が行っていたかについては記載がないが、州県の統治とは一線を画している様子が窺えるので、禁軍が独自に運営していたのであろう。

北辺には州兵・禁軍兵以外に、関東諸州より輪番で派遣される

防秋兵も駐屯していた。そして彼らの中には、任務を解かれた後に屯田に入植した者がいたという。^⑧ また近年紹介された李良という人物の墓誌銘には次のような記述が見られる。

後、淮西節度李忠臣の為に十將に補せらる。……属たま西戎辺を犯し、戍を関右に徴するに、帥を選び將を命ずるは必ず全材を俟てば、淮西行營兵馬使を擢授され、……〔鳳翔府〕普潤に移屯す。公、辺を防ぎ寇を殄すに殺を積むより先なるは莫しと以為い、首謀定策して帝命違わず、〔趙〕充国の屯田に務めて、〔桑〕弘羊の経費を省く。属たま連歳豊稔にして儲蓄すること巨万なり。^⑨

これより関東より派遣された行營の將帥が、配下の防秋兵に対する食糧を屯田より調達する場合もあったことが判る。

すなわち屯田の収獲物は州兵・禁軍兵、防秋兵いずれにも支給されていたのである。

就軍和糴は度支主導の下、その出先機関である巡院が各地方官と協力して行った。^⑩ この政策は先にも述べたように主に豊作時の備蓄創出を目的に行われており、供給先は特に限定されていない。

例えば貞元八年（七九二）に陸贄が北辺で行った和糴は、州兵・禁軍兵双方への支給を念頭に置いている。

鳳翔・涇隴・邠寧慶・鄜坊丹延・夏綏銀・靈塩・振武等道、良原・長武・平涼等城の報を得るに、度支旋糴し供軍するを除くの外、別に儲備に擬せらるる者は、計るに粟一百三十五万石を糴し得べし。

（一章前註④《陸贄奏議》）

鳳翔以下七道は言うまでもなく各節度使の管下であり、残る三城のうち良原と長武は神策外鎮の所在地とされるところである。^⑪

また防秋兵向けの食糧は、大曆九年（七七四）より少なくとも貞元三年（七八七）までの間、基本的には和糴でまかなわれていた。大曆九年五月の詔によれば、彼らの出身道が兵一人あたり二〇貫の和糴費用を負担することが定められている。^⑫ このときの防秋兵はせいぜい四万人足らずであったが、このうちその数は膨れ上がった貞元三年には一七万人にも達し、ひきつづき彼らへの食糧を和糴で確保していたことが伝えられている。同年七月に李泌が彼らの中から屯田入植者を募り、その数を半減させてより以降の事情は詳らかではないが、防秋兵そのものが廃止されたわけではないので、和糴粟支給はその後も続けられたのではあるまいか。なお防秋兵を指揮していたのは派遣先の節度使であるから、分配を担っていたのも恐らく彼らであったと推測される。^⑬

以上より就軍和糴粟は何れの兵種にも支給されていたことが明らかである。

(二) 中央からの補給

中央から補給される各種の軍糧が、前線に輸送されてから後、どこへどのようにして割り振られたのかという対応関係は、今日残された文献を見る限り明確にはできない。京師で費目の別なく一旦取りまとめ、その上で発遣するというような方式が採られていたのかもしれない。よってここでは軍糧が中央で集積されてから辺軍に届けられるまでの過程を追うこととしたい。

まず取りまとめまでの段階を考察しよう。最初に和羅については、筆者が別稿で触れたとおり、全体の指揮を度支が執り、実際の買上業務を京兆府の場合は同府が、河東・代北の場合は代北水運使が担当した。

ついで折羅も同様に度支が総覧し、実施州府が実務を担う体制が採られていた。まず折羅が始めて採用されたときの史料を挙げよう。

度支奏すらく「京兆・河南・河中・同・華・陝・虢・晋・絳・鄆・坊・丹・延等州府の秋夏兩税・青苗等の餞物は、悉く粟麦に折羅し、所在に儲積して、以て軍食に備えん。……」と。詔してその奏を可とす。是れより毎年之を行い、以て軍国を贍う。

〔冊府元龜〕卷五〇二・邦計部平糶・貞元二年一〇月条）度支の主導の下、折羅が軍糧調達を目的に始められたことが伝えられている。また貞元中に京兆尹韓臯が起こした横領事件は地方官と折羅業務との関わりを知る上で示唆に富む。

京兆尹に改む。……又た〔倉曹參軍鄭鋒〕臯に勸めて府中の雜錢を搜索し、百姓の粟麦等三十万石を折羅して、以て恩寵を囿らしむ。〔旧唐書〕卷二一九・韓臯伝）

この記録は、京兆尹や同府倉曹參軍が現場で折羅を指揮し、帳簿を操作して羨余を捻り出すことのできる立場にあったことを教えてくれる。

上供の場合、まず転運使によって京師にまで届けられ、そこで中央で支用される分の割り振りが行われる。そしてその実務を担当するのが東渭橋給納使であった。

渭水は東のかた河に附し、輸流は帝垣の後に逶迤す。垣に倚りて跨ぎ、梁と為る者三、名づけて中・東・西に分かたる。天廩は最東に居り、淮江の粟を内れ、而うして群曹・百衛は是において給を仰ぐ。……官曹・士衛の給を仰ぐ所の者、之を家食に取るが如し。

〔沈下賢文集〕卷六「東渭橋給納使新序記」この使職は唐代後半には常設されていたらしく、近年紹介された

墓誌銘等から同使やその属僚に就任した経歴を持つ人物を若干見出すことができる。この序記では上供穀物が支給される対象として「群曹・百衛」「官曹・士衛」が挙げられているが、百衛・士衛とは京師に駐在する禁軍を意味し、辺軍は差し当たり考慮されていないと解釈するのが妥当であろう。よって東渭橋倉まで送られた軍糧は禁軍に支給されたことが判る。ただし前線に上供穀物が供給されなかったわけではない。その根拠として、それまで各道州に移管されていた漕運業務を中央の指揮下に復すことを求めた、貞元五年（七八九）の度支転運使の奏請を挙げよう。

度支転運使奏すらく「來年の江淮転運米等、比年楊子より米を運びて上都に送り、皆縁路觀察使に分配し、長綱を差わして發遣するに、運路は既に遠くして、実に勤勞を謂う。伏して以んみるに京西屯軍の儲畜は是れ切なり。今請うらくは當使諸院悉く自ら差綱し、節級船運せしめられんことを。冀わくば省便を得て、必ずや程期に應ぜん」と。之に従う。

〔冊府元龜〕卷四九八・邦計部漕運・貞元五年二月条
 ここでは京西軍の備蓄に江淮米が投入されることが記述されている。また永貞元年（八〇五）には杜佑が次のような上奏を行っている。

度支使杜佑奏すらく「太倉の見米八十万石は、貯え來たるこ

と十五年。東渭橋米は四十五万石。諸軍に支するも皆悦ばず。今歳は豊阜なれば、請うらくは権りに北河転運を停め、浜河州府において二百万石を和糴し、以て農傷の弊を救わんことを」と。乃ち百僚に下して議せしむるも、議者同異決せずして止む。〔旧唐書〕卷一四・順宗紀・同年七月甲午条
 ここからも太倉や東渭橋倉に留貯された食糧が辺軍にもたらされていたことが窺える。つまり上供穀物は中央に供される分と辺軍用に分割されたのである。またこの二史料より、その分配業務を統括したのは度支であったことも見て取れよう。

つづいて北辺諸軍へ送納されるまでの段階を分析しよう。取りまとめまでは度支の所管だったのに対し、そこから先の輸送の責任を負ったのは、実は受取側の辺境各道であった。元和一四年（八一九）、夏綏節度使田縉が度支から支給された軍費を横領していたことが明るみに出た。この事件の顛末は次のように伝えられる。

御史中丞崔植奏すらく「撰てねて台に詣りて按劾し得たるに、縉、前に夏州に在り、將を度支に遣わし、將士軍糧及び脚餼共計三万四千三百余貫文を請くるも、將士に支給せずして、上都の私第に留め、雜土もて本道に易送せしむるに及ぶ」と。

賊狀明白にして、坐して房州司馬に貶せらる。……

〔『冊府元龜』卷四五五・將帥部貪黷〕

これより節度使が幕僚を派遣して度支からの補給物資を受領したこと、そして度支から脚価が支給され、各軍までの輸送業務は自ら担っていたことが判明する。受納した財物を長安の私邸に隠匿したとの記載からも、京師において既に度支の管理を離れていることが窺えよう。また「雜士易送本道」とは正規の輸送部隊ではなく私的な部下を使って隠密裏に夏州へ運ばせたと解釈できる。^②つまり京西京北への輸送には中央所管の専門組織が置かれず、各道州が業務を委譲されていたわけで、代北水運使が度支の指揮下で全てを取り仕切っていた代北の場合とは全く対照的である。^③

本節の考察を要約すれば、中央から補給される軍糧は、和羅・折羅穀物の場合は度支の総覧のもと担当州府によって、上供穀物は塩鉄転運使によって京師にもたらされ、その後の前線への輸送は受取手である辺軍が担当した、ということになる。

- ① 「はじめに」註②李論著、および清水木場東「帝賜の構造 唐代財政史研究支出編」(中国書店、一九九七)を参照。
- ② 渡辺信一郎「唐代後半期の地方財政」(中国史研究会編「中国専制国家と社会統合」所収、一九九〇)二三九頁を参照。
- ③ 一章註⑥参照。
- ④ 「元氏長慶集」卷三八に収録されたこの上奏文については始越泰次

氏が詳細な訳注を作成されている。「元稹」同州奏均田状「浅釈」(一章註③)前掲書、第二章第五章等)を参照。

⑤ 旧書卷一七・文宗紀・大和六年二月庚辰奏。

⑥ 拙稿「唐代後半の北辺財政——度支系諸司を中心に——」(東洋史研究五五—一、一九九六)第二章を参照。

⑦ 冊府卷五〇三・邦計部屯田・大和六年二月条「戸部尚書・判度支王起奏、靈武・鄯寧田土寛広、又復肥濃、悉堪種蒔、承前但逐年旋支錢取糶、悉無貯積。与本道計會、立當田。從之。」なお冊府卷五〇三・邦計部屯田・開成元年三月戊午条では度支が「停京西當田」を奏請しているが、これは「停京西當田務」の誤りという可能性もある。

⑧ 一章註②の李泌によって開かれた屯田がこれに当たる。

⑨ 「隋唐五代墓誌匯編」(天津古籍出版社、一九九二)陝西卷四・六一頁および「唐代墓誌彙編」下冊(上海古籍出版社、一九九二)・貞元一〇一所収。なお李忠臣の淮西在鎮は宝応元年から大曆一四年までなので、引用部分は代宗中の出来事と言える。

⑩ 本章註⑥拙稿第二章を参照。

⑪ 何永成「唐代神策軍研究」(台湾商務印書館、一九九〇)四七頁を参照。

⑫ 冊府卷四八四・邦計部經費・同年五月乙丑条「勅曰、……應諸道每歲皆有防秋兵馬……恐路遠往來增費。各委本道節度觀察使・都團練等使、每年當使諸色雜錢及迴易利潤・贖贖錢物、每人計二十千、每道各換所配人數、都計〔錢數〕、市輕貨送上都左藏庫貯納、充別勅和羅用、並不得尅當將軍士衣糧充數、仍以秋取送畢。」(傍線部は旧書卷一一・代宗紀の対応記事で補訂した)。

⑬ 新書卷五三・食貨志三「貞元初、吐蕃劫盟、召諸道兵十七万戊辺。関中為吐蕃蹂躪者十年矣。北至河曲、人戸無幾。諸道戍兵月給粟十七万斛、皆糶於関中。」なお前述の如く防秋兵には屯田收穫物が供さ

れる場合もあったので「皆羅関中」という表現は正確ではない。

⑭ 通鑑卷二二一・貞元三年七月条を参照。

⑮ 曾我部諱雄「唐の防秋兵と防冬兵（上）／（下）」（集刊東洋学四二／四三、一九七九／八〇）。防秋兵の統属先については「下」の四八頁に記述が見られる。

⑯ 京兆府については一章註⑳ 拙稿第一章所掲の諸史料を、代北からの補給は本章註㉑ 拙稿第二章を参照。また冊府卷六一九・刑法部案鞫・裴充の条には、華州刺史・戸部員外郎・左司員外郎等が和羅をめぐる汚職事件で摘発されたことが記されており、和羅業務に中央・地方の様々な官員が携わっていたことが知られる。

⑰ 管見の限り給納使令孤統／判官馬倣／巡官盧伯卿／專知官支汾の四名が確認される。それぞれ「隋唐五代墓誌匯編」江蘇一二二頁／洛陽卷一三・一一六頁／同一六八頁／洛陽卷一四・一八八頁、「唐代墓誌語彙編」下冊・咸通〇六二／大和〇四七／開成〇四九／乾符〇三三等を参照。また令孤統墓誌は清毛鳳枝撰「関中金石文字存逸考」巻五に、馬倣墓誌は「芒洛冢墓遺文四編」巻六に録文がある。なお高橋維男「唐後半期、度支使・塩鉄転運使系巡院名増補攷」（東洋大学文学部紀要三九、一九八六）の註㉒も参照。

⑱ 在京禁軍に上供穀物もたらされていたことは通鑑卷二二二・貞元二年三月条にも記載が見られるが、これは朱泚・李懷光の乱が終息した直後の混乱期の事例で、平時の常制としてこれを評価することはできない。

⑲ 漕運業務の州県への移管は貞元二年正月に崔造が行った（冊府卷四九八・邦計部漕運）。

⑳ ここに登場する度支転運使という使職については若干説明を要する。唐代後半には度支使と塩鉄転運使は分掌されるのが通例だが、徳宗初からしばらくの間はそれが崩れ、財政使職のあり方は一時混乱する。

貞元五年はその期間内に当たっており、次に両使が分割されるのは貞元八年のことである。この間の経過は、高橋維男「唐後半期における度支使・塩鉄使系巡院の設置について」（集刊東洋学三〇、一九七三）に詳述されている。

㉑ 「將士軍糧及脚餽共計三万四千三百余貫文」の箇所は、穀物支給の軍糧と見銭支給の輸送費からなり、合計額に「石」が脱落していると考えられる。というのは、旧書卷一五・憲宗紀・元和一四年九月庚寅条に「眨右衛大將軍田縉為衡王傅。縉前鎮夏州、私用軍糧四万石、強取党項羊馬、致党項引吐蕃入寇故也」と記されており、ここから実際に軍糧が支給されたことが窺えるからである。

㉒ 本章註㉑ 拙稿第三章では、正規の輸送部隊が主として官健によって構成されていたと論じたが、冊府卷四九一・邦計部錫復・元和一五年四月条には次のような記事があり、京畿の民が軍糧輸送に用いられる場合もあったことが判る。「勅、京畿二十有一県、欠元和十四年京百司職田二十二万九千一石束貫等。京畿百姓聞甚艱貧、頃差搬運軍糧、今又修營陵寢、雖應緣驅役、皆給餽錢、而屢牽召、頗妨農畝。豈可更徵懸欠、重使憂愁。……」

本章註㉑ 拙稿第二章を参照。

おわりに

以上の議論を総括し、各軍糧調達費目と分配先との対応関係を示したのが表三である。唐朝が、現地自給と中央・代北からの補給を併用して北辺の軍糧政策を進めていた様子が、おおよそ見て取れよう。そしてここから全国規模での穀物の移動の様子を大雑

表三 軍糧各費目と分配先の対応関係

	費目	担当部署	州兵	禁軍	防秋兵
自給	兩税斛斗	北辺諸道州	○	※	
	屯田	北辺諸道州 禁軍(外鎮所管) (防秋兵行營)	○	○	○
	就軍和糶	度支巡院・北辺諸道州	○	○	○
補給	京兆府等和糶	度支・京兆府		○	
	折糶	度支・首都圏各府州		○	
	江淮上供	転運使・度支	○	○	?

(※は非合法徴収)

☆この他、河東・代北より和糶粟と度支所管屯田の収穫が代北水運使によって供給される

把に捉えれば、①北辺では正税・屯田で現地自給を確保する、②足りない分は、京兆府を中心とする後方地域で和糶・折糶によって調達した穀物を供給する、③さらにそうすることで発生する京畿周辺の不足は江淮からの上供で補う(その一部は辺境にもまわることが)、という玉突き型の構造が浮かび上がってくる。

全体を通して実感するのは、こと軍糧に関しては江淮への依

存度はさほど大きくないと言う点である。貧しい関中を肥沃な江淮が経済的に支えるという構図は、今日我々が抱く感覚からすれば確かに理解しやすい。また近世以降の歴史を巨視的に眺めれば、こうした趨勢にあったことも否み難い事実であろう。しかし第一章の屯田のところでも触れたように、関中の潜在的農業生産力は、当時まだまだ捨て難いものがあり、労働力を供給しさえすれば、なお現地自給を相当に維持できる水準にあった。したがって安史の乱以降、この地の経済を維持するべく唐朝が行った自助努力とは、現地自給のテコ入れにもかなりの力を注いだものだったといえる。この点を改めて強調し、本稿を締め括ることとしたい。

(大谷大学特別研修員